哲学への勧め、あるいは非勧め

荻原 欒
哲学

私自身が大学で哲学の講義を受けた折、聞いた話である。その先生は戦時中、学生であった。ある時、乗り合せた電車で隣の人から、「あなたは何を専攻していますか」ときかれて、「哲学です」と答えると、「あゝテツ学ですか、時節柄、結構ですな、しっかりやって下さい」と励まされたと言う。ここで二番目のテツ学のテツの漢字と、時節柄の意味が分かるだろうか。正解は、テツ学は鉄学であり、時節柄とは、お寺の鐘までつぶして鉄砲の弾にした、「一億総何とか」というあの時代のことである。鉄学に対して本家の哲学の方は、かくも影の薄い、役立つとは期待もされないものだったのである。

状況は今日でも同じで、今年、同学の先輩からの賀状に、「こんな時代に哲学、思想はどのように生きるのか、一矢も報いることなく終るのでしょうか」とあった。こんな時代にとは、先の時節柄とは反対に、このような豊かな、いわば「一億二千総幸せ」の時代にの意味である。にもかかわらず、哲学の出番はやはりなく、研究者はいささか悲愴にならざるをえない。それが一矢も報いることなくである。

かつて哲学はグランド・セオリー(grand theory)を目指し、そのように自負もしていた。グランド・セオリーとは、すべての学の学、つまりあらゆることに通ずる、一番根本的な原理の追求である。しかし今日、そういったものとしての哲学への期待は世間にもないし、また哲学研究者の中にも希薄である。なぜなら、哲学はこの点でこれまで何回も失敗してすっかり信用を失っているし、また今日、学問も生活も様々に分化し、そしてそのようにバラバラのままでもよいと、多くの人々が思っているからである。

しかしそれでも、世間から冷たくされても、哲学固有の問題、領域はやはりある……と思う。そこで私の哲学へのイメージは次のようになる。

見渡すかぎりの牧場である。サンサンたる初夏の太陽のもと、牧草は青々と豊かに生い茂り、様々な野の草はそれぞれの花を咲せていて美しい。放牧の牛や羊は、三々五々草を食べたり、のんびり寝そべったりしている。のどかな風景である。しかしこの牧場にも限りはある。広いけれども周りは柵で囲まれていて、柵の向うは、内側とはちがっ

て一面の荒地である。膝までつかる沼地、凍りついた土、空はどんよりと暗く、大地は冷い。明るい牧場、周りの荒地、牧場が我々の世界で、荒地が哲学の世界である。牧場に住んでいるかぎり、外の荒地に関心はない。柵や荒地のあることにすら気づかない。荒地は無視され、柵と荒地について語る者は少数派である。

けれども、やはり明るい牧場の向うに荒地はある。そのことに気づかない人は多いし、それはそれでよろしい。明るい暖い牧場で一生が送り切れれば、それにこしたことはないのである。しかし、それでも時折ふと荒地の存在に気づかされることがある。普段の生活をしていて、例えば失意、肉親の死、その他、ひょっと、生活のリズムが狂うような時である。このような時、日常生活の明るい牧場に、一瞬、暗い荒地の影が差しこむ。そして、荒地の存在は、もしこうした体験がなければ、我々に気づかれないだろうし、したがって哲学への道もない。逆にいうとこの体験が、いわば哲学理解のための必要条件なのである（十分条件ではかならずしもない）。牧場のみに生きる者にとって、哲学は本来無用であったが、荒地の存在に気づいた以上はそれに関わらざるを得ないことにもなる。

哲学理解のための必要条件、かならず通らなければならない門としての体験とは、先走って一般的に言えば、懐疑の心と、無常を感じる心である、と私は思う。しかし懐疑、無常といっても抽象的ですぐには理解できないかも知れない。私は以前にあるところで、哲学の入門的講義をした時、そういったことがらの具体例をいくつかあげ、それらの中の一つにでも、共感あるいは関心をもつなら、哲学への第一歩、しかもなくてはならない第一歩を踏み出したことになると言ったことがある。ここでも、それらをいくつか紹介してみよう。はたして自分が、荒地に気づいた多少とも哲学志向の人間であるか、あるいは牧場で一生仕合わせにやっていける人間であるか、振り分けてみるのも一興だろう。

その1　部屋に坐って自分の周りを眺めてみる。机があり、窓があり、天井がある。次に目を閉じてみる。周りの事物（対象とよぶ）は見えなくなった時にもそれらの事物は存在しつづけているだろうか。このことをちょっと考えてもらいたい。しかし、もちろん存在しつづけているだろう。なぜなら再び目を開ければ、それらはそこに見えるし、目は閉じていても手で触ったり、音を聞いて確かめることができるからである。そこで今度は目だけでなく、すべての感覚の働きを止めてみることにしよう。といってもそれでは徹底しないから、この際一旦死んでみることにする（こういうのを思考実験という）。この時、周りのものはやはり存在しつづけるだろうか。この場合も多分存在しつづけるだろう。なぜなら、だれか他の人が死んだ時のこと

を考えれば、その人は死んでも、その時事物はありつづけたことを知っているからである。しかし今は自分の死である。目を閉じたのとちがって、死んだ後もう一度生きかえることはできないし、他人の死とちがって、自分の死んだ後の様子を自分で確かめるわけにはいかない。それでも事物はありつづけると確信をもって言えるだろうか。一体事物が存在するとはどういう意味なのだろうか。

その2　だれしも自分というものはあると思っている。例えば、周りのものを見るのは自分であるし、足で歩くのも自分だからである。そして自分の存在はこのように確実だから、したがって自分を含むこの世界も確かだと考えている。中国の古典『荘子』斉物論篇に、有名な「荘周夢に胡蝶となる」という話がある。荘周つまり荘子がある時胡蝶になった夢をみた。ひらひら舞って実に楽しかった。そしてその時、自分が荘子であることはすっかり忘れていた。しかし夢から覚めてみればまぎれもなく自分である。はたしてこれは、自分が夢で蝶になったのだろうか、今現実に自分がここにいるのはもしかしたら蝶がみている夢ではなかろうか。蝶が自分の夢なのか、自分が蝶の夢なのか、一体どちらなのだろう。自分が本物で蝶が夢だとは、何を根拠にいえるのか、というのがその内容である。普段、確実で手ごたえあると思っている現実、つまり周りの一切はもしかしたら夢ではないのか。ふとこのように思ったことはないだろうか。

カント

その3　もう一つ、同じ『荘子』の逍遥遊篇に、「大鵬とコバト」の話がある。大鵬は巨大な鳥で（横綱大鵬の名はここからくる）飛び上ろうとしてその翼で海面を打つと、その波は三千里に及ぶ。つむじ風に乗って上ること一飛び九万里である。少しの風では浮揚できず、夏の大風に乗ってはるか南の空に飛び去るのである。この話を聞いて、ヒグラシとコバトが笑って言う。自分らが一所懸命飛んでも、楡の木の梢から梢に移ろうとして場合によっては達しないこともある。大鵬の飛び方のような、そんなバカな話があるものかというのである。『荘子』の話はここまでであるが、我々に引きつけて考えてみた時、もしかしたら、我々人間

はこのヒグラシ、コバトではないだろうか。我々は我々なりに生活し、そして種々なことについて、あゝだ、こうだと知ったつもりになっている。しかし、それはヒグラシ、コバトの生活圏、知識と同じく、きわめて限られた狭い範囲のもので、どこか外に我々の思いも及ばない世界があるのではないだろうか。ヒグラシ、コバトにとって、大鵬のことが全く思い及ばないように。

その4　無限というものもよく分らないことがらである。そして気づかないけれども、いろいろなところに登場し、重要な役割をしている。一番身近かなのが数の無限である。自然数を一、二、三と数えていく。一億になり、一兆になり、一京になる。さらに順に一を加えていけば、いくらでも大きくなる。限りなく続くのである。我々の知っている大きさとは限られたものである。だからそれを捕えることもできた。ここで、大きさに限りがない、限りない大きさ、一体これはどういう意味をもつことがらなのか。小さい方では、一センチの長さを半分にし、また半分にしていく。このことを順につづけていくと、ついには零になると思うかも知れない。しかしていねいに考えていくと零にはならないのである。いくら小さくなっても少しは長さが残る。最後のところはどうなっているのか。数学を離れて別の例をあげれば、あることがらが起るには必ず原因があるという。とすれば、その原因にもまた原因があるはずで、さらに原因の原因の原因もあり、このことは無限につづく。現実にはこの系列はどこかで止って、最終的な原因があるのだろうか。あるいは止らないとすれば、無限につづく先の方はどうなっているのか。もう一つ、意識という心の状態がある。意識とは、自分が今何かをしていると知っている、そのことを指す。するとすぐに、その知っていることをさらに知る意識があって、このことも無限につづく。最後のところはどうなるのであろうか。この二つは無限後退(regressus in infinitum)とよばれる哲学の難問である。数学の例も含めて、無限とは何なのか、一体無限を我々有限な人間が捕えることができるのか、分らないことが多い。考えれば考えるほど、いろいろな疑問がさらに派生してくる。

その5　人間はいつかは死ぬ。それのみならずいつ死ぬか分らない。コトバの狭い意味での無常である。死における無常については、蓮如上人の「白骨の文」を読んでもらえばよい。「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終まぼろしのごとくなる一期なり」で始まる、葬儀の時にも読まれることのある有名な一文である。現代語で要点を言うと、「おおよそはかないものは人間の一生である。未だかつて一万年生きたということは聞かない。一生は過ぎやすい。死は、自分が先か、人が先か、今日かも知れないし、明日かも知れな

い。朝には紅顔の若人が、夕には白骨になるのである。死んでしまえば眼は閉じ、息は永久に絶え、紅顔は変じて、桃の花のようだった美しい姿もなくなってしまう。その時、親類縁者が集って歎き悲しんでも、何の効果もない。とんだことになったとして、火葬にすれば、ただ白骨だけが残るのである」。死んだら一体どうなるのか。死ぬとはどういうことなのだろうか。

その6　旧約聖書に『ヨブ記』という章がある。昔、ヨブという名の人がいた。この人は潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた。つまり、何も、どこからも咎められる筋合いのない生活をしていた。しかし神の試しによって、そのヨブにある時以降、災いが次々にふりかかる。まずヨブの留守中にその家に、蛮人の襲撃、火事、台風がつづいて起り、彼の財産である家畜、家が失われ、雇人、さらには何人かの自分の娘まで死んでしまう。それでもヨブは、これらのものは後から身についたものであり、生れてきた時はたった一人であったのだからと耐える。ところが次に、災いはヨブ自身の身体に及ぶ、頭のてっぺんから足の先まで全身、悪性の腫物でおおわれ、膿と痛みで骨は皮と肉にくっついてしまい、これがはたしてヨブであるのか分らないほどに姿形が変ってしまう。さすがのヨブも歎く。自分は全く正しく生きてきて、悪いことは何もしていない。にもかかわらずなぜこうも苦難がふりかかるのか。ヨブの歎きである。

ヨブほどでなくても、こうした体験はないだろうか。自分が何か不正をして、その報いとして悪いことが起るなら仕方がない。あるいは自分のやり方がまずくて、ヘマをしたため、結果が悪く出たのなら、これも諦めきれる。しかしヨブに象徴されるのは、自分に咎のないのに起る災いである。つまり世の中には理不尽なことがあるということである。どう考えても納得がいかない、にもかかわらず容赦なくふりかかってくる、自分にとって望ましくない事態の存在である。悔しくても、誰に訴えても、どうにもならない不条理な災いである。

その7　ヨブの話はまだつづく。聖書の立場からいうと、実は正しい人ヨブに正しくなかったことが一つだけあった。それはヨブが自分を正しいと思っていたそのことである。ヨブの歎きは、自分が正しいにもかかわらず災いを受けている、というところにあったのだから、自分の正しさはそこで大前提になっていた。ヨブはそのことについに気づく。究極的に、あることの正しさを判定することのできるのは神だけであって、人間が自分の立場からそのようなことを行うのは越権（罪）であることに気づく。その時、神は、ヨブの腫を癒し、財産ももとに数倍して返し、その試みを解くのである。

これは聖書の立場からの話であるが、聖書を離れても、

はたして我々にことがらの正しさを判定する権利があるだろうか。あるいは正しさを判定する能力があるだろうか。例えば自分が正しいと思ってやった行為が、人を不幸にしていたというようなことがよくある。動機はよくても結果まで見通せなかったのである。自分が正しいといくら思い込んでも、それは自分の知識、見通しの及ぶ範囲内での正しさである。もっと広い、気づかなかった世界があり、その中では、自分が正しいと思っていることが、かえって不正になる、そういった状況も考えうる。思い込んだ正しさはあくまで自分の正しさで、絶対の正しさではない。自分の正しさを絶対の正しさとして人にも強制し、結局不幸を招いた例は歴史にいくらでもある。歴史の話でなくても、家族の間でも、知人の間でもそうである。自分の思い込みが他人を不幸にするのである。厳密な議論では動機がよければ許されるというわけにはいかないのである。自分を万能としてはいけない。

以上、懐疑と無常の実例あるいは材料を七つ示した。これで十分であろう。その1からその4までは懐疑心の例である。懐疑とは、自分に分っているつもりであったことが本当は分っていなかったことに気づくことである。もっと突っ込んでいえば、「分る」とはどういうことか反省してみることである。その5からその7までは無常を知らしめる材料である。無常とは、自分の思うとおりにならないことがあるということである。無常感とは自分が万能でないことに気づくことである。懐疑心と無常感は哲学の必要条件である。何でも分っている、あるいは分ることができると思い、すべてことがらは自分の望みどおりになると思っている限りは、哲学は不要で、哲学への道もない。かといってその道に踏み込むことがいいことかどうかは微妙である。何しろそこは見通しのきかない、泥沼の荒地なのだから。

以上、いささか古典的な、無骨な（つまりダサイ）「哲学への勧め」あるいは「哲学への非勧め」であった。

デカルト